

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書

研究代表者 所属・職名 附属中学校・教諭

氏 名 佐藤 大輔

研究期間 令和6年度～令和7年度

|             |  |
|-------------|--|
| 研究プロジェクトの名称 | ICTを活用した国際交流モデルの開発<br>～日本と中国、台湾、韓国、オーストラリア、デンマークの中学生との<br>協働遠隔授業の実践的研究と現地フィールドワークを通して～   |
| 研究プロジェクトの概要 | <p>学校教育で行われる国際理解教育や教科教育において、ICTを活用して国と国とを繋ぎ、多様な他者と交流することを通して、学習者の英語学習意欲やコミュニケーション力を向上したり、異文化に対する理解を促進したりすることを示唆した実践が報告されている。岩船・原・佐藤（2023）は、オンラインにおける交流が、表面的なコミュニケーションにとどまり、深い学びになりにくいという課題を挙げ、この課題を克服する授業デザインについて考察を行い、今後のオンライン学習における新たな展開の可能性を示唆した。</p> <p>しかし、学校教育における海外とのオンライン交流を、年間を通じて継続的に行うことは難しく、単発の単元になってしまうという課題が挙げられる。交流を通して、より深い学びを実現させ、態度や行動の変容につながるような工夫や仕掛け、継続的なサポートを付与する国際交流の実践が必要である。また、グローバル化が急速に発展する社会において、言語や文化、風習や価値観等が異なる他者とのつながりを築くことは、未来の社会を担う子供たちにとって必要不可欠である。そこで、世界の国々や異文化に対する関心や外国の人々と親しんでいこうとする心情や態度の涵養、自己表現能力や生きた外国語の習得の大切さなどのコミュニケーション能力の必要性を実感するなど、生徒の可能性を最大限に導き出す効果的な国際交流モデルを開発・構築することにより、今後の国際交流実践の発展に大きく貢献すると考えた。</p> <p>本研究の目的は、以下の2点である。</p> <p>①オーストラリア、中国、台湾、韓国、デンマークの中学生との交流は、生徒にとってどのような効果や変容があるのかを探索的に分析し、明らかにする。</p> <p>②中学生を対象とした、ICTを活用した海外とのオンライン交流授業のモデルを開発、構築する。</p> |
| 研究成果の概要     | <p>①について</p> <p>【令和6年度】</p> <p>[協働について]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 賀先生 (Western Sydney University) とのオンラインミーティング実施 (2024. 6. 28)<br/>→国際交流実践におけるテーマや内容について協議</li> <li>・ 中国成都市への現地フィールドワーク、日中国際理解教育交流会にて実践発表、現地教員との交流、国際交流実践に向けた検討会 (2024. 9. 19～9. 24)</li> <li>・ 韓国国際理解教育学会第 25 回学術大会 (誠信女子大学校) にて実践発</li> </ul>  |

表、現地教員との交流、国際交流実践に向けた検討会（2024. 11. 2）

- ・台北市立大直高級中学校訪問（2025. 2. 9～2. 11）にて現地教員との交流、国際交流実践に向けた検討会

[実践の内容]

- ・台湾の中学生（台北市立大直高級中学校）と日本の食文化（弁当）についてオンライン交流（2024. 5. 27～5. 31）
- ・中国（成都市石室天府中学校）の中学生とのオンライン交流  
→互いの文化やそれぞれの国に対する疑問についてやり取り
- ・韓国（ソニル女子中学校）の中学生とのオンライン交流  
→2024. 11. 27 実施予定であったが、相手校の都合によりキャンセルのため、実施できず

【令和7年度】

[協働について]

- ・韓国AOD (Apple Open Day)に参加、現地学校訪問、韓国・台湾・香港の教員との交流（2025. 12. 4～12. 7）

[実践の内容]

- ・台湾の中学生（台北市立大直高級中学校）と日本の食文化（弁当）についてオンライン交流（2025. 5. 13～5. 14）
- ・中国（成都市石室天府中学校）の中学生とのオンライン交流  
→互いの文化やそれぞれの国に対する疑問についてやり取り
- ・韓国の高校生（G-school）とSDGsをテーマとするオンライン交流  
→相手校の学生の都合により、令和8年度に延期

【本研究の成果として】

- ・オンライン交流の事前事後アンケートの生徒の振り返りから、英語を学ぶ意欲の向上や英語を学ぶ価値を見いだす生徒の姿が明らかになった。
- ・母語が異なる他者と共通言語である英語を駆使し、互いのことを伝え合うことを通して、相互理解を深めることができた。
- ・相手の国や文化への興味や関心を高め、自分たちとの共通点や違いに気づき、相手意識を高める姿がうかがえた。
- ・自身のSNSで交流相手とつながりを築き、授業外で英語を使ってやり取りする環境をつくる生徒もいた。

[今後の予定]

- ・韓国の中学生、高校生との社会的な話題についてオンライン交流  
→延期（両国の学校事情による）※令和8年度実施予定
- ・デンマーク、オーストラリアの中学生と非同期型交流の実施  
引き続き、研究プロジェクトメンバーでオンラインにおける交流活動のねらいや内容等を議論し、協働して国際交流プログラムについて検討を重ねる。そして、実践も継続的に行い、その中で見られる生徒の姿や成果物、レディネス等の結果から、探索的に分析を行い、海外との国際交流プログラムの効果を検証していく。

②について

- ・2年間のオンライン交流や、今後予定している交流を通して、生徒の姿に着目し、成果と課題を分析、整理することにより、海外とのオンライン交流を実施するうえで、生徒の英語学習への意識の変容、英語コミュ

|                                   |  |
|-----------------------------------|--|
|                                   | <p>ニケーション力の向上や異文化理解等の促進を可能とする効果的な海外交流モデルを開発、構築していく。</p>  |
| <p>研究成果の発表状況<br/>(※今後の予定も含む。)</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 25 回韓国国際理解教育学会にて研究の経過発表 (2024. 11. 2)</li> <li>・ 第 33 回国際理解教育学会 (同志社大学) にて、ICT を活用した国際交流実践について発表 (2025. 6. 28)</li> <li>・ 学校教育学会 (2026. 6. 6) にて本研究の成果を報告</li> <li>・ 令和 8 年度以降も引き続き、台湾、中国、そして韓国 (G-School、誠信女子中学校とのオンライン交流を計画している。今後も、教員間のつながりを更に深め、各校の教育カリキュラムを調整、検討しながら協働実践の機会を設定する。プロジェクト終了から 2 年 (2026. 4. 1 ~ 2028. 3. 31) の間に、引き続き実践と検討を実施することにより成果を蓄積し、ICT を活用した国際交流モデルの改良に努める。そして、その成果を論文にまとめ、未定ではあるが英語教育関連の学会で発表する。</li> </ul> |
| <p>学校現場や授業への研究成果の還元について</p>       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語の授業で、中国、台湾の中学生との継続的なオンライン交流の実施中 (2024-現在)。</li> <li>・ 今後も各国の研究者及び教員との交流を継続し、子供たちにとってより効果的な国際交流実践の在り方について検討を重ねていく。</li> </ul>  |